北水試百年こぼれ話　⑥稚内水産試験場庁舎の百年の歩み

キーワード：北海道水産試験場員駐在所、宗谷支場、稚内支場、稚内水産試験場、百周年、庁舎の歩み、稚内市街の大火

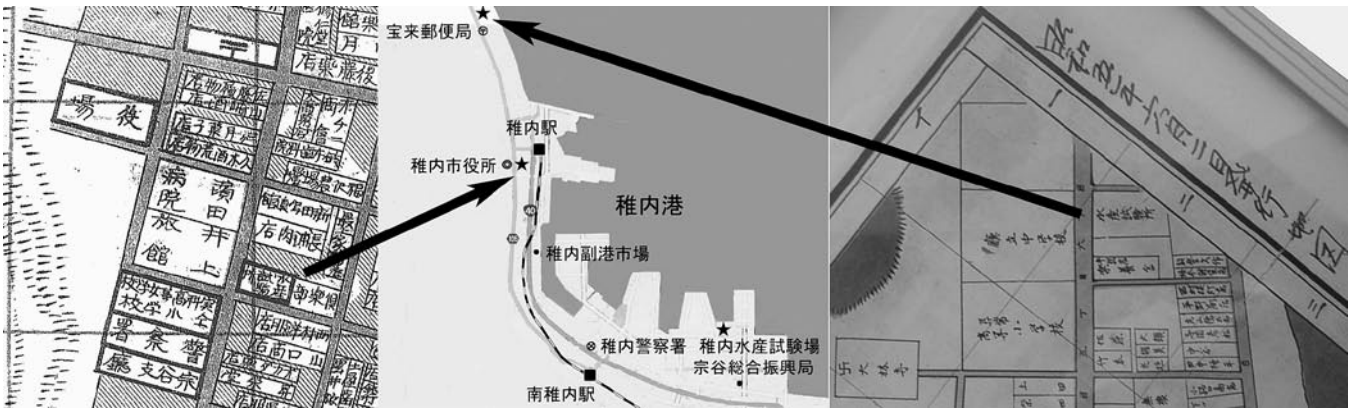

図１　稚内水産試験場庁舎の歴代設置場所（中央の地図：現在の稚内市街略地図の★印）、左の地図：昭和元年の稚内市街地図の役場周辺部分、右の地図：昭和五年の稚内市街地図の宝来地区部分

稚内水産試験場は、明治43（1910）年10月30日に、稚内に北海道水産試験場員駐在所として設置されてから、平成22年で百年となりました。明治43年と言えば、日韓併合という世相の年であり、北海道では深川～留萌間に鉄道が開通し、洞爺湖岸に温泉が湧出した年でもありました。今回は、稚内水産試験場の開設百年を記念して、庁舎の設置場所の変遷を中心に調べてみました。

稚内では市街地がほぼ全焼する火災が３回発生しています。最初は明治44年５月、２回目は昭和３年10月、３回目は昭和５年11月です。駐在所が設置されていた稚内町本通り北１丁目地区（図１左）の建物は最初の火災で全焼していることから、大正５（1916）年に宗谷支場となった現存する最も古い庁舎の写真（写真１）は、当然火災後同所に建てられたと考えられます。昭和元（1926）年の市街地図から、現在の稚内市役所前庭の向かいに建つ丹羽ビルの敷地が最初の設置場所とわかりました。写真１の右端下の奥には別の建物の入り口が写っており、その前には道路があると考えられることから、この写真の正門は西側（現在の市役所側）に面していたようです。写っているポプラの木の葉が少ないこと、道路の消火栓らしきものの周りに融雪して凍ったような跡が見え、さらに門柱の下に雪止めの装備らしきものがあることから、早春あるいは初冬の時期のようです。とり

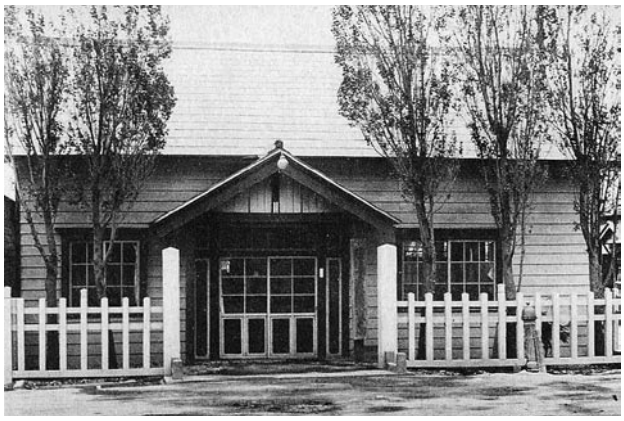

写真１　初代庁舎（宗谷支場、本通り北１）

あえず、この庁舎を初代と呼ぶことにします。

しかし、初代庁舎は、昭和３（1928）年の火災で全焼し、事務所は宗谷支庁に間借りし、翌年12月に稚内町稚内村トベンナイ（現在の宝来４丁目）に宗谷支場を新築して移りました（写真２）。昭和５（1930）年６月発行の市街地図の端に水産試験所の記載が見え（図１右）、現在と同様に「水産試験所」あるいは「水産試験場」と一般に呼ばれていたことがわかります。二代目庁舎は、昭和５年11月の火災の類焼は免れて、その後、昭和６年の稚内支場への名称変更、戦後の北海道立水産試験場稚内支場、そして昭和39（1964）年の北海道立稚内水産試験場への機構改革を経て、昭和42（1967）年まで36年間も使われました。

写真２　二代目庁舎（稚内村トベンナイ）

写真３　昭和38年稚内支場正面入り口前での職員写真（福田敏光氏提供）

写真４　三代目庁舎（宝来４丁目）

北水試百周年記念誌に掲載された昭和39年の最後の支場時代の職員写真（写真３）をみると、庁舎正面入り口前から左右に下りる階段に沿って付けられた２段のコンクリート板の段差をうまく利用して撮った写真であることがわかります。

この時、支場から独立した水試になるということで、現在も続いている職員親睦会が結成され、その名称募集が行われたそうです。その結果、新人であった富田恭司氏提案の「望樺会」が採用されました。念のため、稚内は樺太（現サハリン）を望む地であることを記述しておきます。

昭和42（1967）年12月には、同所に鉄筋コンクリート２階建ての三代目の庁舎が完成します（写真４）。古い木造庁舎の裏（ノシャップ岬側）に棟続きであった加工場を壊して、さらにノシャップ側にずらして新しい加工場を新築して事務所として移り、その後本庁舎を壊して、鉄筋の庁舎を建てたとのことです。この頃、支場から格上げとなった各地の水産試験場でも、ほぼ同じ形の鉄筋庁舎が建てられましたが、稚内水試の庁舎の特徴は、他場が建物中央に正面入り口があったのに対して、北よりの風雪を防ぐため、入り口は南端に設けられたことです。また、屋上まで出られるように階段も作られていました。この宝来４丁目の庁舎前には道路を挟んで中央小学校のグランドがあり、昼の生徒の給食時間に許可を得て、野球の

練習をしていました（写真５）。年末には野球部員が小学校の職員室に酒ビンを持ってお礼のご挨拶に行ったとか・・・。

そして、現在の四代目の庁舎は、平成10（1998）年９月に、稚内港の南東部、天北第１ふ頭と第２ふ頭の間にある、天北ふ頭２号ふ頭物揚場の岸壁の前（末広４丁目）に新築されました（写真６）。この地区の国道寄りには、北海道や国の合同庁舎が建てられており、稚内市の都市計画にも沿った移転地でしたが、水試は飼育施設の取水の関係からより海に近い場所となりました。そのため、当初は酔っぱらったロシア人船員が庁舎に侵入するという事件もあり、前の道路も日本人よりロシア人の方が多いという場所でしたが、平成16（2004）年７月１日にSOLAS条約が発効され、天北ふ頭にフェンスとゲートが設けられたことやロシア船の入港数も減ったこともあり、現在ではトラブルは生じていません。時には、突如水試前の岸壁がチカ釣りの好ポイントとなり、多くの太公望で賑わうこともありますが、バス停からは遠く、なかなか市民の方が気楽に訪れる場所ではありません。そのため、百年記念事業時には、稚内副港市場のギャラリー広場をお借りして出前イベントを行いました（本北水試だよりの記事参照）。

写真５　庁舎を背景に、中央小学校グランドでの昼休みの野球の練習風景（富田恭司氏提供）

写真６　四代目庁舎（末広４丁目）、稚内公園と百年記念塔を背景に

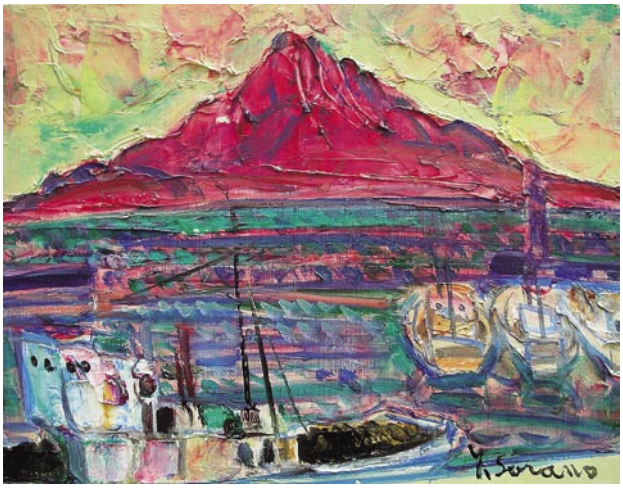

写真７　空野八百蔵画伯の油絵「利尻残照」

なお、宝来４丁目の三代目の庁舎完成時のお祝いとして、昭和43（1968）年に、当時の浜森辰雄稚内市長から、空野八百蔵画伯の「利尻残照」という題の油絵（Ｆ６号）の寄贈を受けました（写真７）。空野画伯は独立美術協会に所属していた広島県呉市出身の、「色の魔術師」と呼ばれる方だそうです。40余年の時を経て、現在も場長室に飾られています。

最後に、稚内市街地図の収集など、多方面でご協力頂いた稚内市東政史総務部次長（現、会計室長）に感謝致します。

（吉田　英雄　稚内水試　場長

報文番号B2340）